
大切な時間

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な時間

【Zコード】

Z2147E

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

小学生の終わりに出会った、桜並木を見て喜ぶ少女。海斗は、すでに決まっているできごとをくつがえそうと行動をした。海斗・桜葉の、短いけれど大切なとき。こどもの日企画「ムーンチャイルド」参加作品です

五月になつたばかりの初夏の風が、ほほをなでる。

白い半袖シャツに黒の長ズボン。中学になつて初の夏服は落ちつかない。おひしたての夏服が眩しい少年は、夏の気配や、着慣れない制服に身じろぎをし、真ん中で分けた短めの黒い前髪を、つまらなそうにさわる。

車のすれ違いが難しいほど、細い道。右手には景観を損ねる工事中の看板。入れないよう黄色と黒で土手をかこつていて。掘り起こされ、あらわになつている土手に顔をしかめた。

桜道が汚された。

土手には桜が植えられており、少年が生まれる前から、美しく可憐な花を圧倒するほどに咲き誇らせ、住民も弁当をたずさえては、長く続く桜並木の下で花見を楽しみ、大切にしてきたのに。

「ヨソの人間は勝手だ」

少年がぽつりと呟く。

土手の上には、精神科の病院が建つようだ。工事施工業者と、病院の責任者からの住民に対する説明は、市の建設承諾を取り付けた上で、説明会であった。

反対をしても時すでに遅し、

「市のほうの許可は、もう頂いておりますので」

その言葉のみを繰り返す説明会だったと、父親は怒りをあらわにして言っていた。

桜はきられ、掘り返され、土をならした後は、コンクリートで固めるらしく。

遙か先に三本ほど残っている桜のところまで、荒らされた土手をにらみつつ、歩き出した。

「大人って、つまんねえ人間ばっかだ」

少年は、自分の中の黒いなにかを吐き出すよつこ、声を出す。

「海斗、おはよー！ 相変わらず疫病神と仲良しさんみたいな顔してるね」

あはは。と快活に笑い、少年 海斗の背中を全体重かけて押してくる。可愛いというよりも成長したらキレイ系になりそうな少女。

絶対、調子に乗るから。絶対、そんな事は口にしないが。

半袖のセーラー服。黒く長い髪は、風に遊ばれ、柔らかそうに波打った。

「いつてえな。それとなんだ！ 疫病神つてーー おまえ、オレに失礼だろ！」

「やあだ。おまえつて……まだ名前覚えてくれてないの？」

印象的な切れ長の目が、いたずらっぽく細められ、顔が近付く。

「さ・く・ら。はい、言つてみ？ さーくーらー」

「…………うるさいよ。分かつてるよ。遅刻したくねえんだよ」

海斗は顔を背け、口をとがらせる。

覚えてないわけじゃない。その名前を、この荒らされた場所で言いたくなかった。

早足で、縁が生い茂る桜の木から遠ざかる。

「…………どうせ、子供だよ」

「は？ 当たり前じやん。中学生になつたばかりだし」

ため息を吐いたつもりが、間違つて心の声まで吐き出しちしまつたようだ。

大きくもない目を丸くして、あきれたように言つてくる桜 日

下 桜。

小学校も、卒業間近に転校して来た彼女は、明るい性格で、すでに皆とも打ち解けている。

「勉強も出来て、運動神経もいいなんて……神なんて世の中にいねえよ」

「あのや、ちつきから心の声がダダもれてるよ？ 大体、神様なんて信じてないくせに」

別段、驚きもせず、否定もせず、あきれた声を返す桜。

「お礼は言つとくね。ソレ、私の事でしょう？ あと美人で性格も良いつてのが抜けてるけど、今回はカンベンしといてあげる」
桜のいたずらっぽい笑顔は、彼女に似合っている。
海斗はため息を吐き、ゆっくりと言葉を選んだ。

「ほんと、イイ性格してるよ」

その言葉に、桜はまた楽しそうに、あはは。と笑った。

残された桜の木から、少し離れた左手に小さな駅がある。

「……そういうえば、海斗と初めて会つたのが、この辺だよね」
明るい声の調子は変えずに、桜が狭い道のまんなかで、駅を背にして振り返った。

海斗は、そんな桜の顔が見ることができなくて、駅のほうに目を向ける。

「ここでオレと会つと、いつも言つよな」

「そりやあね。つて、さつきから気になつてたんだけど。
あんた、いつから『オレ』つて言つてんの…?
ついこないだまで、『ボク』つて言つてたじやん！」

ものすごい勢いでつかみかかり、長い黒髪が軽く広がる。

海斗は自分の顔が、その勢いと同じくらいのスピードで、赤くな

るのがわかつた。

「う、うるさいな！ もう中学生だし、ボクだって変わるんだ！」

「あ、ボクって言つた」

口の左端を持ち上げて、桜は笑う。

「今は、練習中…」

「へー。れん・しゅー・ちゅー」

いよいよ顔中がひきつり、桜は笑いをこらえることなく、大声で笑つた。

それをふくれつづらで、海斗はにらむが心の中で安堵する。

桜が笑っているなら、それでいい。

桜と出会つたのは、たしかに駅前の、この場所。

そう、あれは三ヶ月前

まだ固いピンクのつぼみを枝いっぱいに飾りつけた桜並木の下で、彼女は目を輝かせ、踊るように手を広げて、嬉しそうに笑つていた。たしかに桜の木は、立派な枝ぶりで住民たちは愛してきた。しかし、この町で見たこともない少女が、まだ咲いてもない桜を見上げて大騒ぎしているなんて。

海斗は、変なヤツ。とつぶやくと、謎の少女が振り返つた。

「ここにちはー！ この町の子？」

笑顔がよく似合つ。

桜が、咲いたのかと思った。

まだ枝が赤くなつて見えるだけなのに。

「ねえ、聞いてる？」

「……うん」

海斗はまばたきをしたり、のぞきこむやつある少女から一歩後ずさる。

「なんだよ、おまえ。見たことないけど」

「引っ越ししてきたの。ここにすこし桜の木があるんだね」

「まあね」

この辺りの行事として、年2回ほど「ロミオ口」と称して大人たちが草むしりするくらいだが、この桜並木をほめられて、悪い気はしない。

「おまえ、お父さんとかお母さんは？」

「一人で先にきたの。ここは桜がすごいって聞いてたから」「まだ咲いてないじやん」

海斗は、やつぱり謎だと言わんばかりに、あきれた声を出すると、少女は細い目をさらに細めて口をとがらせた。

「いいじやん。わたし、桜の木が好きなの！」

海斗は少女の親が来るまで、この話が尽きない少女と一緒に待つことになってしまった。

漫画の見過ぎと囁かれるかもしけないが、ひょっとしたら桜の木が人にはけてるんじゃないとかと、当時は本氣で思つたのだ。

赤いワンピースに、白のカーディガン。風になびく長い髪。

住宅街になつてはいるが、周囲は田畠で囲まれているようなのかな場所で、キレイな格好をしている彼女は、少し浮いて見えたから。

少女は言った。

桜が咲く時期に、よく転校するんだ。

友達との別れはつらぐ、それでも行く先で桜が満開に咲いていると、自分を受け入れてくれている気持ちになれ。だからさびしくても我慢ができたのだ、と。

やがて少女の両親が現れたことで、淡い期待はもろくも崩れ去ったが、少女は去り際に海斗を振り返って、いたずらっぽく笑う。

「あ、一緒に待つてくれて、ありがとう。

ちなみに、わたし『おまえ』じゃないから。田下 桜だよ。ようしきね

「ボクは、鈴木 海斗」

「じゃあね。カイト

手を振つて立ち去る桜を、海斗は見えなくなるまで見送つた。道は一本道で、同じほうへ行くのだが、海斗は動かなかつた。別れのあいさつもしたのに、後からついて歩くのも恥ずかしかつたのもある。

しかし、それよりも

海斗は、静かにたたずむ桜並木を見上げた。

「なんだ、きられないといけないんだよ

桜は、答えない。風が吹き、サワサワと小さな音を立てるのみ。気は沈み、歩き出そうとした足も重い。

「桜をきる意味なんか、ないじゃんか

でも、何をしたらいいのか、分からない。
それがよけいに海斗の足をにぶらせた。

「「」と知つたら日下、泣くんじゃないかな

「早く言つとけばよかつたのかな」

どんどん気持ちは沈みこむ。

タ「」はんのとき、そして寝る瞬間まで、海斗は悲しむだろう桜のことを考えていた。

「海斗。なにかあったの？」

朝、起きてきたときの様子を見て、母が驚いたように声をかけた。

「……なんでもない」

「わかった。じゃあ、気がむいたら言つなさい？　お母さん、待つてるから」

どう言えばいいのかわからなくて、海斗は逃げるよつに顔を洗いに行く。

鏡を見て、思わず笑ってしまった。

泣きはらした赤い目。

涙の残る顔。

これじやあお母さんも心配するか。と顔を洗つ。

台所に戻つてくると、母は普通だった。いつもと変わらず味噌汁をよそい、「」はんを盛つてくる。

「お母さん」

「ん？　話してくれる気になつた？」

海斗は母の手元を見て、思わず声をかけた。

母なりの冗談なのかもしねい。

「そんなんに『じはん』食べれないよ」

海斗の茶碗には、『じはん』が大盛りを越えた力キ氷盛りになつている。

「やだ、面白くなかった？ 力キ氷盛りかよー。とか、絶対つっこんでくれるつて、期待してたのに」

母は子供のように口をとがらせ、『じはん』を炊飯器に戻す。

答えた出ない問題を、どうどう廻りに廻らせて、泣き寝入りしてしまった自分がバカみたいだ。と海斗は思つ。少しだけためらつてから、なんでもないことのように声を出してみた。

「あのセー、あの桜並木つてさー。絶対に残せないのかなー」

「なに？ それで泣いてたの？」

「泣いてない！」

母は、普通盛りにした茶碗を、海斗の前に置き、自分もテーブルにつく。

怒つて大声を出す海斗に、母はお茶をついで海斗の前に置いた。

「……そうだね。お母さんは、難しいと思つ。」

説明会だって口クなもんじゃなかつたし。でも、海斗は残したいのね

母が優しくほほえんで海斗を見ると、大人しくうなずいていた。

「そうね。他の人にも方法がないか聞いてみるわ。

お母さんだつて、あそここの桜は大好きだから」

そんな言葉に海斗の目が輝いた。すぐさま母は言葉を付け足す。

「海斗。きっとダメだらうけど、なにかしたいんだつたら、力の限りやりなさい。

でも、けつして人を傷つけるようなことしちゃダメよ？」

「……どうして元気でも、傷つけたりやうかもしない」

「海斗、誰を傷つけたくないの？」

セイが海斗の泣いていた理由だらつと、母は聞く。

しかし、海斗は黙つたままだ。

「おはよー」

「あら、陸。もつもつんな時間？ 海斗、早く用意しなきことよー。」
慌てて母は立ち上がり、鍋を火にかける。

海斗と似たような髪型をした高校生の兄 陸は、浮かない顔の弟の頭をこづいた。

「おまえ、もうすぐ卒業式だろ？ ずる休みすんなよ

「いたいなー！」

洗面所に消える陸の後姿に文句を言つて、海斗は食器をかたづけた。

ランセルをかついでから、ちりりと台所を見ると、陸の茶碗もカキ氷盛りにされている。どうするのか見ていると、戻ってきた陸が苦笑いして、母に声をかけた。

「母さん、カキ氷盛りかよ」

「あー、気付いた？」

嬉々として茶碗をわざる母に、じつそりため息を吐く陸。

兄ちゃんって、意外と優しいのかもしれない。と、海斗もじつをり思つ。

「兄ちゃん」

「おー、まだいるのかよ。まじで遅刻するぞ」

多少驚いた顔で、椅子に座つたまま、陸が後ろを振り返つた。

「あのや。友達があの桜並木がなくなると、泣こむやうがもしれない。」

でも、ボクがそいつの泣こてるの見たくないときつて、どうしたらいい?」

「女か? むまえも、なかなかやるな」

口の端を持ち上げて、面白そうに笑う。

海斗は顔が赤くなるのに気付かず、声をあげた。

「ち、ちがうよ! 友達って言つたじゃん」

「だれだよ。おまえの友達つったら、桜がなくなつても泣くつりやついてやつん」

「やつぱ、聞くんじやなかつた」

ふくれつたらの海斗は、きびすを返して玄関へ向かう。

陸が、まあ待て。と追つてきた。

「その友達を見なきやいいじゃん? それもできないのかよ」

「できない。たぶん」

陸は頭をかきながら、困つたよつて言葉を続ける。

「じゃあさ。アレが取り消しになるとは思えないけど、署名でも集めればいいじゃん。

なにもしないで終わるよりか、なんかしたつて思えたほうが、まじやね?」

「……それって、どうやるもの?..」

「正式な文書とかつて、あるかもしないから。学校から帰つたら、ネットで調べてやるよ」

その言葉に、小学生の弟は顔を輝かせ、靴のまま家に上がりこみ、詰め寄る。

「まじで! 絶対? こいつ帰つてくる?」

「いいから、学校行け！ 遅刻なんかしたら、やつてやらねー」

仲のいい兄弟のもとへ、見送りに出てきた母が憤怒の形相で叫ぶ。

海シ！
土足麗禁！」

「みんなさーい！ いってきまーす！ 兄ちゃん、絶対だからな

一九一八年

適当に返事をしながら台所に戻ってきて、ぐるりと壁に怒りの表情を浮した母が、それを追いかけ、

やつぱり女の子がらみだつたわけ?」「ちよつと! なに?

陸も否定せず、それ以上は言わなかつた。

登校途中、赤ハンドセルを背負つた桜を見つめ、ためらひながら

いつも海斗は声をかける。

桜は 桜並木がなくなることを 知つていった。

残念そうに笑う桜に、朝のでき」と話を話してみる。

一 兄ちゃんが、シニメイ集めてみれば?
二 て言つたんだ。

諸一のあうせ

「ショメイつて？」

「知らない」

勢い勇んで出てきたものの、はたと海斗は我に返した。 桜のあきれた視線が突きささる。

慌てた海斗が、声を張り上げた。

一兄ちゃんが調べてくれるので書いてたから！

集めた。なんとかなるかもしれないし！」

中には、この「おもてなし」の精神が、今もまた、日本の文化や習慣として受け継がれており、世界中の人に愛される文化の一端となっています。

「なに、こいつ。見ないヤツだけ?」

ひょろりとした少年は、ジロジロとぶしつけに桜を見た。

「なに、こいつ。チヨー失礼。海斗って、こんなのと友達なわけ?両手を腰にあて、眉をひそめる。

一人はしばらくこちらに向き合っていたが、先に声を出したのは桜だった。

「わたしより背が低いくせに」

「な! そんなの今は、関係ないだろ!」

より陰険な黒い渦が一人を取り囲む。

海斗が、困ったように声をかけた。

「あのさ、歩きながらじやないと、遅刻するんだけど」

二人は無言で歩き始める。

しばらくその状態で歩いていたが、巻き込まれた海斗が真っ先に音をあげた。

「葉、いいかげんにしろよ。日下は引っ越してきたばっかなんだし
れ」

「じゃあ今さつき、一人で話してたことって、なんだよ」

桜に背が低いと言われた少年 葉は、海斗にかみつく。
やつあたりであるが、身長に関しては、この三人の中で海斗が一番低かつたりするのだが。

「桜並木がなくならないよ!」シヨメイ集めようつて話だよ!
海斗の言葉に、葉はあからさまにあきれた顔をした。

「いまさら、なに言い出してんだよ。無理に決まってるじゃん! しかも、シヨメイってなんだよ!」

「無理かどうか、やってみなきゃわかんない。」

つて話をしてたんだから、あきらめちやつてる人に、なにも言つてほしくない」

そっぽを向いたまま、怒つた調子で言つ桜。

話がまたケンカ腰になつていく。

前髪をさわりながら、海斗はそれでも最初から説明してやつた。ただ、桜が関係する話はしなかつたが。

「だからさ、兄ちゃんが調べてくれるんだって。

今日ヒマだつたらわ、ボクんち来て計画立てようぜ？ 三人で

三人で。と言つたのは、失敗だつたかもしれない。

「えー！ なんでこいつが一緒なんだよ

と、葉が反発するのと同時に、桜も抗議の声をあげた。

「えー！ 無理つていう人となんてやだー」

より険悪にさせてしまつたらしい。

小学校は、駅からほど近いところにある。

「おまえたち！ はしれー、鐘が鳴るぞ！」

校門からは先生の声。

ちらりと桜と葉は視線をかわし、走り出した。

絶対に、負けない！

二人は並ぶ。しかし桜がすぐに抜きに出た。

先生の横を、そのまま通り抜け、足を止める。

「勝つた！」

爽やかな桜の笑顔。くやしそうにつづく葉。

置いていかれた海斗は、それでも門が閉まる前には間に合った。

「……どうでもいいじゃん」

「よくない！ わたしの勝ちだもん。あんた言ひ「ひとつ聞きなさいよね」

ふんぞり返る桜に、葉はさすがに立ち上がった。

「そ、そんなこと、決めてないじゃんか」

「じゃあねー……」

葉を見て、口の端を持ち上げて笑う。

「あんたの名前を教えなさいよ」

「……は？」

あんぐりと口を開けて、葉は放心する。
海斗も、目を丸くしてから吹き出した。

卒業式の練習も終わり、三人は帰りも一緒に帰る。
ランドセルを置いてから、海斗の家に集合し、陸もじばらくして
帰宅した。

「なんだ、忘れてなかつたのか」

顔を輝かせて出迎えた弟に、兄も声をかけるが、後ろにいた葉と
桜に目をやる。

変わらずひょろっとした葉と、見知らぬ髪の長い少女。

この子が……と、思わず笑いそうになるのを、陸はぐっとこりや
た。

「海斗。まあ、がんばれよ」

「は？ なにが？ 兄ちゃんが調べてくれるんじゃないの？」
兄としての言葉だが、海斗はわけがわからない。

「ああ、それだけど」

と、一枚の紙を三人に渡す。

そこにはなにやら難しい漢字や言葉が並んでいた。その横には、名前や住所を書く欄も。

「詳しい先生がいて、説明したら作ってくれたんだ。

オレも内容確認したし、それでいいと思つ。

それは、白紙のままとつておいて、『ペーしまくつて学校中に配れば?』

「すげー! じゃあ、ロビー機貸してよ!」

どうだ。と、海斗を自分の部屋に招き入れ、付いて行こうとした桜に声をかける。

「ちょっといい?」

「はい、おじやましてます。田下 桜と言います」

軽く頭を下げてあこがれる桜。

少しためらい、前髪をさわると、桜はクスリと笑った。

「兄弟はクセまで似るみたいですね。海斗もよく前髪をわってます」

「あいつは、オレの真似をよくするからな。

えーと。田下さん? いらっしゃ辺の子じゃないよね。なんでの桜

並木にこだわるの?」

桜は、目を細めて笑い、

「わたし、ここに引っ越してきました。

わたしの名前も桜だし、放つておけないと思つて」

間違つてはいないだろう。だが、あの海斗がここまで積極的なのは初めてだ。

いくら一田ぼれしたとはいえるが、本人は否定するだらうが、それだけの理由で動くだらうか?

「そうか」

陸は腑に落ちなかつたが、それ以上聞くこともできず、うなづいた。

「アリーшиб、たくさんの人にお名前を書いてもらひて、市の偉い人に渡す。

とにかくそれを紙に書いて、陸が壁に貼つた。

「いいか？ 小学校で配つて、家族や協力してくれる人に名前を書いてもらひえ。

先生……は、書いてもらえるかわからないけど、みんなに配れ」「えー！ 大変じやん！」

陸の言葉に、葉が悲鳴をあげる。

少しだけ海斗も思つたが、桜の様子を見て、出遅れてよかつたと思つ。

「……じゃあ、やめたら？」

「やらないとは言つてないだろ！ 大変だつて言つただけじやんか」
海斗は、桜がお母せんの怒つた顔と同じだ。とも思つたが、口には出れない。

だつて、怖いから。

険悪な雰囲気になるのを、陸が止める。

「今からそんなんじや、やめといた方がいいぞ。

葉、これは大変なことなんだ。相手にしてるのは、校長先生を雇つてる人間だからな。

しかも、いつたん決まつた工事を止めることが出来た話なんて、聞いたことがない

陸の話を聞き、葉は海斗をにらみつけた。

「そんなの、やっても意味ないじやんか」

桜もうつむいてしまつている。

陸は、ゆっくりと話を続けた。

「意味はあるかもしないし、ないかもしない。」

これだけの人数が、あの桜がなくなることに悲しんでいるんだ。

ということは、わかつてもらえる。

これだけの人数が、施工業者や病院側の説明に不服だったか、わかつてもらえる

「ひらえむ」

一文を指さし、病院側の説明の仕方なども書かれてこることを、三人に話す。

「せつかくだもん、やるひよ」

桜がぽつりとつぶやいた。

静かになってしまった部屋の中で、彼女の言葉は大きく響く。

「うん、やるひよ。

今なにもやらなくて、桜並木がなくなつてから文句なんて言えないと

海斗も、内容がよくわからない紙面を眺めながら、うなずいた。

葉は、黙つたままだが、やがて立ち上がる。

「葉、どうするの？ やめるなら、紙は置いてつて」

桜が低い声で、呼び止めた。

「……やるよ。ばあちゃんとかにも、書いてもらえるか頼んでみる。ボクだって、あの桜並木はなくなつてほしくない」

帰るね。と、分厚い紙の束を抱えて歩き出す。

陸は、その背中に声をかけた。

「おい！ 一工事までの期限はあと2ヶ月だから、せめて今月いっぱいには回収するって言つん

だぞ」

無言でうなずいて、葉は出て行つた。

「わたしも帰るけど、明日の朝、紙を運べるよつにカバン持つてくるから待つててね」

と、桜も帰つて行つた。

陸も同じ空間にいるのに、海斗は取り残されたように感じる。

どうしよう。ひょっとして、大変なことを始めてしまったんじゃないか。

そして、みんなを巻き込んでしまった。

そんな海斗を見て、陸はなにも言わなかつた。

三人が、間違つていることをしているとは思えない。

病院側は、説明会の最後にわざわざ付け加えて、桜が散る季節など、業者を入れる費用が大変だから。とも言つていたからだ。

施工業者は、慌てて地盤を固めるためとか言つてたが、本音は病院側のほうだろう。

そんな人間を、あつさり認めた市の役人にこの署名を出して、も、ただ額面通りに受け取るだけの対応をされるかもしれないことは話さない。

しかし、そうかもしないし、ちゃんと読んでくれるかも知れない。

そればかりは、わからないのだ。

ただ、陸はニュースなどを見て、ちゃんとした対応はないだろうと確信している。

市民が騒いで、施工中止になつた例は、見たことがない。

だが、なにを言つても無駄だ。と、あきらめて傍観してしまえば、役人も業者も、市民は納得して歓迎してくれていると思つだらう。

そして、同じことが繰り返す。

直ることなんかなくて、どんどんエスカレートするだらう。

いぐらの辺で文句を言つたとしても、そのほうが無駄なのだ。
彼らには、届かないし響かない。

文句は聞こえるようにしてやらなければ、意味がない。

まだ悩む海斗に、陸はただ頭を軽くこじりやつた。

「がんばれ。弟」

「いたつ！ 決めしたことだもん、やるよ」

いつものように、ふくれつづらをする海斗。
少しだけ、冷たくなってしまった空気が、なごんだよう感じた。

次の日からは、大忙しだった。

時間のあるときに、全学年のクラスに用紙を配り、近所にも配る。
一番緊張したのは、校長先生のところに行くときだ。

しかし校長先生は、署名をしてくれた上に、
「知り合いにも頼んであげよう。君たちは立派なことをしているんだよ。

これから、なにがあつても自信を持ちなさい。先生は君たちを誇りに思つ

とまで言つて、何枚か引き受けてくれた。

校長先生が署名をくれたことで、他の先生たちは気軽に署名をくれ、同じように何枚か引き受けてくれる先生もいる。

もつと怒りられるかと思っていた。

小学生が、なにをやつてる。と言われるかと思っていた。

ダメだと思つていた分、拍子抜けもしたが、なによりも嬉しかった。

「なんかさー。みんな思つてたより協力してくれるんだな」
瘦せてる体に、どこからそんな力が出るのか、紙の束が詰まつた
力バンを軽々と担いでいる。

学校の「コピー機まで貸してもらい、増えた紙の束。
同じくらいの量を運んでいるのに、どうして疲れないんだろうと
ため息を吐く海斗。

「みんなが、どれだけあの桜並木が好きだったのかつて。
わかるだけでも、わたしすごく嬉しいんだけど」

桜が手ぶらでスキップを踏む。

「ボクもそれ思った！なんか、これ始めてさ。良かつたと思つよ
いつの間にか、意氣投合している二人。
海斗は、重みに辟易して声も出ない。

朝、海斗の家に一人が来たとき、陸と母の一言で、男一人が荷物
を持つことになってしまったのだ。理不尽だ。理不尽極まりないと、
二人は抗議した。

が、高校生と大人に勝てるわけがない。

そんなことを考えながら、前髪に手をやる余裕もなく、歩き続け
た。

そして三人が思つていた以上に、署名は集まつた。

大きな紙袋、五つ分。

近所の人たちだけが、かき集めてくれても、これほどは集まらない
い。

陸も高校で声をかけたし、ネットで募集をかけたりもした。
期限が短かつたこともあるが、ここまでこぎつけられたのは、こ
れだけの人数が同じ気持ちになつてくれたから。

もちろん、名前だけ貸してくれた人も中にはいるだらう。

でも、三人は素直に嬉しかつた。

応援の声もかけられたが、頭ごなしに叱られることもあつたから。いつたん配り終えてしまつてから、とたんに怖くなつてきていた。やっぱり間違つていたのではないか、迷惑をかけてしまつたのではないか。と。

しかし、この署名の束は応援の証だ。

三人は気持ちが奮い立ち 市役所に電話したときは、縮こまつてしまつたが 勇気つて、じついうことを言つんだな。と実感する。

お父さんや、近所の人たちにも手伝つてもらつて、直に市長に渡すことさえできた。

「こんなに……君たち三人で集めたのかい？ 大変だつたね。

しつかり考えさせてもらひよ」

と、笑顔を絶やさない市長の口から言つてもらえて、すっかり安心してしまつ。

これで三人は、約束を果たしてもらえる。と思つたのだ。

無事に卒業式が終わり、満開の桜並木に見送られることができた。自分たちが、この桜並木を守つたのだと、誇り高い気持ちでいっぱいだつた。

桜が散り、工事予定の前日から、工事が始まつてしまつまでは。

その一報が入つたのは、農作業のために、朝早くからでていた林おじさんからだつた。

日曜日に工事を始めるなんて、驚き以外なものでもない。

海斗はパジャマのまま、慌てて家を飛び出した。

桜並木までは、そんなに離れていない。

角を曲がり、思わず足が止まる。

工事用の柵で囲まれ、大きな重機が土を掘り、チェーンソーで桜を切り倒している。

木の間に、土の間に、オイルの間に。
遠巻きに、それを住民が見ていて。泣いている人もいる。

海斗は、その場から動くことができず、声も出なかつた。
うつろな頭の中で、

どうして？

と繰り返される。

桜と葉が、いつそばに来たのかもわからない。
立ちすくんでいる海斗の場所から、無残にも切り倒されていく桜の木を見て、二人は海斗の手をにぎつた。

怒りよりも、信じられない気持ちでいっぱいだつた。

駆けつけてきた近所の人たちの、なぐさめてくれる声も、三人には届かない。

どうして？ なんで、こんなことじぐるの？

海斗は、知らずに泣いていた。

立つていられなくなつた桜は、その場にうずくまつてしまつた。
葉も、海斗の手を強くにぎつたまま、歯をくいしばり涙を流す。

三人の母親が、家に連れ帰ろうと、彼らの肩を抱く。海斗が、震える小さな声で母に聞いた。

「どうして？ 約束、したのに……なんで？」

海斗の母も、桜の、そして葉の母親も、泣いていた。

「あんな大人に、みんなは、絶対なっちゃダメよ。絶対……絶対よ？」

春は、終わってしまった

海斗は、嫌な思い出を振り払つかのように頭を振った。学生カバンを小脇に抱えて、どうしても慣れない半袖シャツの、一番上のボタンをはずす。

「なんか全部変わったのに、オレだけ取り残されてる気がする」思わずつぶやいてしまった言葉に、振り返った桜の顔は驚きを表していた。

長い髪をなびかせて、海斗に顔を近づける。

「変わった？ 全部？ バカ言わないで！ わたしは絶対、変わらない」

言つだけ言って、肩を怒らせ、足早に先を行く。あまりの形相に、立ち止まってしまった。
ぽかんと口を開け、海斗が見送っていると、後ろから思い切り突き飛ばされる。

「いつてーな！ オマエもかよ」
ギリギリのところで、転ぶことは回避できたが、文句を言いながら振り返るとそっぽを向いた葉が笑っている。

体制を建て直し、ふくれつたらで前髪をさわった。

葉も、少し怒った顔になり、そのクセを指さした。

「おまえが、バカなこと言うからだ。

そのクセも変わつてないくせに……大体、ボクらが変わるか！
バカ！」

葉も、先を行く桜に追いつかんばかりの勢いで歩いていく。

二人の攻撃ならぬ口撃に、海斗はただ目を丸くした。

あせんと見送つていると、先を行く一人が振り返る。

いたずらっぽい笑顔が、二つ。
変わつてない。変わらない。

「次は絶対、ボクが背中をどつく！」
走り出した海斗に、二人は笑う。

「無理無理！ 追いつけるわけがないじゃん」

桜は、走りやすいように学生カバンを小脇に抱えた。

「そこまでは変われないだろー」

葉はそのままの体勢で、舌を出す。

変わりゆくモノ。

変わらないモノ。

いつだつて、一緒に乗り越えられる仲間たちと共にいたい

(後書き)

読んでくださって、ありがとうございます！ いかがでしたでしょうか？

実はこのお話の中の、病院側の説明で、「市のほうの許可は、もう頂いておりますので」というのは実話です。

それと近所にある、病院とは別の場所にあった桜並木がきられてしまつた事に、衝撃をうけたので、組み合わせてみました。

* 時間シリーズとして書いた続編をまとめた、目次を作成しました。
下部『そこにある時間』リンクから、気軽にのぞいてください
嬉しいです。

* 光太朗様から、とても素敵な『時間シリーズ』を書いていただきました！

みんなの特徴をいかんなく發揮してくださっています！ 嬉しくて
嬉しくて～

後書きあとに、リンクを貼りましたので、ぜひぜひのぞいてみて
くださいませ

二次創作、時間シリーズ（いただきもの）

・『ちよつとだけ憂鬱な時間』（光太朗様作）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147e/>

大切な時間

2010年10月11日01時59分発行